

観光客も含め、すべての人が 「逃げ切れる」「助けける」

北海道知床に位置する斜里町ウトロ地区。知床観光の拠点として、流氷の来る街として、また温泉街や観光遊覧船の漁港として。年間を通して地域住民と観光客が共に過ごしています。



斜里町ウトロ地区の特徴は？

高橋さん：世界自然遺産知床に最も近い市街地であり、毎年多くの観光客が訪れ、豊富な漁獲量の水産業など、豊かな地域である反面、半島特有の厳しい気象や高低差のある特殊な地形から、昭和56年に発生した台風被害や近年増加している暴風雪など、市街地被災や孤立など、決して災害と無縁ではありません。

桑島さん：ウトロ地区的住民は約1,200人弱ほどですが、ここで働く方、国内だけでなくアジアからの観光客も含めると、災害時に考えなければならない人数は数千人には及びます。

地区防災計画を策定したきっかけは？

桑島さん：この地区は海岸から非常に狭いところが町になっていて、それが高台の方につながっているという土地です。



ウトロ地区防災計画より

地区で大きな災害が昭和56年ありました。私たちはこれを「56災害」と呼んでいます。この地区にもいろんな災害がありましたが、それはすごい土砂災害でした。大雨が降り橋も流され激甚災害になりました。私もその時ちょうど消防団おりて被災現場に行きましたが、災害の恐ろしさを感じました。

その後に、最大のきっかけになったのは、やっぱり3.11、東日本大震災です。いろいろな地区が様々な土地の特徴によって被災している状況をテレビで見ました。火災があったところを見て、やっぱりそういう災害は大変なことだと思いました。特に津波は恐ろしいものだと思い、これはこの地区でも何とかしていかなくてはいかんなどと思っておりました。

こうしたことをふまえて、自治会の役員のみなさん方、自治会の紹介で地区住民のみなさんに説明をして「取り組んでいきましょうよ！」ということでスタートしました。

策定プロセスは？

高橋さん：ウトロ地区防災連絡会議は、平成15年に行政が主導でウトロ地区、各団体等の災害発生時に連絡体制をとり、情報交換・共有を行うために設立した組織です。

行政は補助的なサポートをする形で、ウトロ自治会と連携を取って防災計画を作っていました。平成25年から地区独自の防災訓練などを、ウトロ自治会が主体でやっています。こうした活動は、特に市街地では行政主導でやるところが多いと思います。一方でウトロ地区は中心市街地にある町役場から40km離れており、自治会を中心につくった自らの地区防災計画策定に取り組んでもらってきました。

アドバイザーの方からは？

桑島さん：鍵屋先生は秋田県の出身ですよね。言葉の中で普段聞きなれない秋田弁ができるのがすごく親しみが湧きます。そうした人間らしさが言葉を通じて、大事なことも面白おかしくして非常に分かりやすく、私だけでなく集まったみなさんも、感銘したのではないかと思います。

高橋さん：鍵屋先生からよく言われたのが、こうした災害関係の会議は「楽しくなければ」ということ。楽しめないと会議もだんだん減っていくだろうということで、少し工夫を凝らした内容で進めてもらったことが印象的でした。

桑島さん：ワークショップなどの開催時に体を動かすアイスブレイクを必ず一回はしてもらいました。「みなさん、立ってください」から始まり（笑）、ちょっと息抜きましょうっていうような。そしてみんなを引き付けて防災に取り組むようにしているんですね。

町からの支援は？

高橋さん：避難所の開設は、斜里町地域防災計画の中の避難所設置に関する記述に基づいて行っていますので、ウトロ地区ではそこに記載されている2か所が避難所となります。それらを運営するのが町ウトロ支所の私ども職員2人と、町役場の職員が来られる状況であれば来て手伝うことになっています。

ウトロ地区防災計画にも中心市街地から40km離れていて、津波の際には寸断されることを想定していて、地区の人たちが自らこういった会合を開催したり防災訓練をやっている状況なので、役場の人的支援は、基本的にはウトロ地域内で完結させるような形を取っています。

ウトロ地区防災連絡会議の中で行政関係機関というのが、役場の他に、道の出先もあるし、環境省の出先もあります。知床支援センターという行政の外部団体もあります。こうした組織と連携を取って避難所開設を役割分担しながら進めているところです。

計画策定において工夫した点は？

桑島さん：3.11のテレビの画面を見ていて、みんなが交通渋滞になって、亡くなっている人がたくさんいらっしゃいました。そうした事態を防がなくてはと、是非ウトロ地区では津波発災時に高台から降りてくる交通を一方通行にしたいと思ったんです。「地元のルール」つまり「ウトロルール」です。冬は特に道路脇の雪や路面凍結などで特に危険ですが、夏も含めて通常で津波の時はとにかく一方通行にして、降りてこないことにします。もう一つ裏の方の道路があって、どうしても下へ降りないといけない人はそちらの方を通って降りて下さい。こういうルールにさせてもらいました。なぜこのようになったかというと、高台に上がる道路が3本しか無いんです。その3本を有効活用しないと、みんながどの道でも上がっていいでは、いざというとき混乱すると思う。1本目の道路は何班の人が使う、2本目は誰が使います。このように決めないとやはり駄目だろと思って、居住地に近いところを上がっていくようにしてもらい、自動車と歩徒の場合はどうしますよということも含めてまとめました。これはワークショップを通じて決まったことです。



いずれもウトロ地区防災計画より

計画の意義、効果は？

高橋さん：みなさんが懸念されている事がこうして計画の中にルールとして反映できました。それが非常に特徴的と思っています。ウトロのみなさんがワークショップに参加して「やって終わり」ではなくて、計画としてしっかり話し合った結果がルールとして盛り込まれているのがとても意味があると思いました。

ここまで防災についての具体的な取り組みが地区の中で進んできたのも、地区防災計画を「今できるところから」と令和2年にリリースしたことが大きいですね。こういったものを決めて動かしていく、行政だけでなく住民の意見を吸い上げて形にしていくことで、こうした計画の周知がされたから住民だけでなく観光業のみなさんにも意識が高まっているのを感じています。

今後の課題は？

桑島さん：観光のお客様の対応ですね。今は全く来てませんけど。コロナが治ったらまた、少しづつ復活してくると思います。



知床に来られるお客様は12%ぐらいが海外から、残りが国内です。これから大事なのは、外国人のお客様の対応もしっかりしなくてはいけないということ。避難誘導の看板への英語表記も含めてですが、急ぐものから取り組んでいこうと。もっと目につきやすい、読みやすい看板を作りたいと思っています。



左が桑島さん、右が高橋さん

取材協力：斜里町役場企画総務課

ウトロ支所長 高橋正志さん

前ウトロ地区自治会長、ウトロ地区防災連絡会議

計画推進委員 桑島繁行さん

取材日：2022年3月21日